

## 主の力は私たちの弱さの中に働く

金 度 亨

奨励者紹介 [きむ・どひょん]

日本キリスト教団ゴスペルハウス教会牧師

韓国メソジスト教団派遣宣教師

このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、また、あの啓示された事があまりにも素晴らしいからです。それで、そのために思い上がることはないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いについて、離れ去らせてくださるように、わたしは三度主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

(コリントの信徒への手紙二 12章5—10節)

### 短所は個性であり強み

「トイ・ストーリー」(1995)、「バグズ・ライフ」(1998)、「モンスターズ・インク」(2001)、「ファインディング・ニモ」(2003)、「ウォーリー」(2008)、「カールじいさんの空飛ぶ家」(2009)、「インサイド・ヘッド」(2015)、「ファインディング・ドリー」(2016)。

これらのアニメ映画の監督、脚本、プロデューサーを務めたのはアメリカ人のアンドリュー・スタントンです。

彼のアニメに登場するキャラクターは、完璧で、格好いいスーパーヒーローというよりは、何か少し足りない、弱い人物が多いというのが一つの特徴であります。特に、「ファインディング・ニモ」「ファインディング・ドリー」のようなアニメは、人間の弱さを表すためにあえて致命的な弱点をもつ人物を主人公として作った作品であるとスタントン監督は言っています。

この二つのアニメ映画の主人公であるニモとドリーはとても可愛いキャラクターであります。現実では嫌がられやすい性格をもっている人物でもあります。

「ファインディング・ニモ」「ファインディング・ドリー」、この二編のアニメを観た方はご存知だと思いますが、その主人公であるニモとドリーは障がいをもっています。

このアニメでニモとドリーは、我々は皆完璧ではない存在であり、何一つ同じような存在ではない事実

をその人物をとおして象徴的に表しています。スタントン監督はこのアニメをとおして、足りなさや障がい  
は欠陥・欠点ではなく、一人ひとりを特別な存在とする固有性であるという事実を話したかったと言いま  
す。普通の人々はドリーの健忘症を弱点だと思いますが、しかしそれこそがドリーの個性であり、力である  
ということを書いたかったということです。

「ファインディング・ドリー」は、「欠点は個性」「短所は個性であり強み」「ありのままの自分を受け入れ  
られたら幸せだ」という大切なテーマが根底にあります。「自分の短所を、弱さを欠点ではなく、個性とし  
て受け止めることが重要なんだ」と監督は語っています。

「ファインディング・ドリー」のスタントン監督はあるインタビューで次のように言いました。

「僕は、人と人は違うんだということを描きたいんです。ドリーの忘れっぽさ、もどかしさは問題ですか？欠  
点ですか？そう思うかもしれないけど、その特徴が彼女を特別な存在にしているんです。変える必要など  
ないですよ。そのことにドリーも気付いて、自分の個性を受け入れるわけですね。

これは普遍的な物語です。誰もが自分の欠点を抱えていて、それが何かを始めようとする心にブレーキ  
をかけているかもしれない。でも個性を受け入れることに気付けば、変わるんですよ。[最新シネマ批  
評・インタビュー編]2016年7月14日(<https://youpouch.com/2016/07/14/368716/>)

## 「T4作戦」はing?

我々が生きているこの世の論理は、弱者、病人、あるいは体の不自由な人は問題を抱えている人だと理  
解してきました。そのような考え方をもっている人は意外と多いです。

第二次世界大戦の時、ナチス・ドイツではT4作戦(テューリアサクゼン、独:Aktion T4)というのがあり  
ました。簡単に言いますと、ナチス・ドイツで行われた安楽死政策であります。安楽死を名乗った大虐殺  
であります。この政策の理論的根拠は優生学思想にあります。

この作戦は法律家カール・ビンディングと精神科の医師であったアルフレート・ホッヘによって1920年  
に提案されました。二人は『生きるに値しない命を終わらせる行為の解禁』という本を出版しました。ホッ  
ヘによると、脳損傷や精神薄弱のような障がいをもっている人はすでに「精神的に死んだ状態」または、  
「人間存在の空虚な殻」にすぎないと主張します。だからこれらの人々を国の利益のために安楽死させ  
た方がいいという主張でした。

幸いにも、カール・ビンディングやアルフレート・ホッヘの主張はただの主張で終わってしまい、その当時  
に実現されることはありませんでした。

しかし、1939年に「生きるに値しない命を終わらせる行為の解禁」が国家政策として実現されるよう  
になりました。その結果、1939年10月から第二次世界大戦が終わるまで5000名に至る障がい児が毒  
物、または餓死によって殺されてしまいました。最小8万人から最大20万人に至る成人障がい者もT4作  
戦の犠牲者となり、収容所において命をうばわれました。

このようなとんでもない差別的な考え方をもっている人はただ過去だけに存在したわけではありませ  
ん。今、我々が生きている現在にもそのような考え方をもっている人が存在し、そのような差別的な考え方を  
行動に移す人だっています。私と皆様の周辺にもそのような考え方をもっている人がいるかもしれないと  
意識する必要があると思います(日本の国民を代表している国会議員の中で、生産性がない愛って意

味がないというふう発言した人がいる。今もその発言は撤回していない。

### 自分の弱さと向き合う

本日、私はこの弱さということパウロの手紙をとおして、学び、ともに考える時間を持ちたいと思います。本日の聖書の箇所パウロは一つ大切なことに気付かされます。それは、本当の自分らしさ、本当の強さは自分の弱さを認める時に現れるということです。聖書の記録によると、パウロは学識があり、当時ローマの市民権をもっている人でした。すなわち、地位と名誉、ある程度の権力ももっておりました。にもかかわらず、彼には克服できない弱さがありました。その弱さがどのようなものであったか、聖書は詳しく記録しておりません。

身体的な痛み、精神的な病、社会的な迫害、コンプレックスによる劣等感、人間関係の不調和などが考えられます。しかし、パウロはそのような弱さを認めたくなかったのです。その弱さを隠して、なんとか乗り越えようとしたようです。神様にその弱さから離れ去らせてくださるよう、祈りました。

その中で、パウロはいつも偽りの自分と向き合っていたようです。本当の自分を忘れ、空虚な人生を生きていたかもしれません。しかし、そのような人生の真只中で、パウロはイエス・キリストと出会い、イエス・キリストをとおして自分の中にあつた弱さを認め、その弱さをさらけ出した時、本当の自分と出会うようになりました。

このコリントの信徒への手紙二12章5節から10節までに、パウロは「弱さ」あるいは「弱い」という言葉を5回も語っています。

「しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません」（5節）。

「『力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」（9節）。

「わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあつても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです」（10節）。

パウロは自分の弱さをこのように認めることになりました。自分の弱さを知るようになりました。知っただけではなく、その弱さによって非常に苦しむ経験もしました。しかし、その弱さと直面することになりました。

彼はこの弱さをとおして自分が自分の力によって生きているのではないことを知るようになりました。神の憐れみがなければいつきも生きていけないものであること。それを幾度も思い知らされてきたのです。自分がどうしようもなく弱い者であることを彼は知らされてきたのです。

パウロが神にその弱さから離れ去らせてくださるよう祈った時、神はこのように言われました。

「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました」。

あなたは弱さではなく、強さを獲得して、自分の強さによって働きたいと言うのか。それは違う。私はあなたに弱さを与えた。あなたの弱さの中で、あなたの弱さをとおして、私の力が働く。あなたが弱さを失って強さを獲得するなら、もはやあなたは私の力を受けることはできない。私があなたに与えたあなたの弱さ。それが私とあなたを結びつけているのだ。主イエスは彼にそのように言われたのです。

### 弱さは神の働く場所

このことがキリスト教における弱さの理解です。弱さは弱さで終わらないのです。弱さによって神様に繋がりが、自分以外の弱い人々と連帯させられるようになります。だから、我々は弱さは問題であり、弱さは克服すべき悪であると思うことは聖書的ではないことを覚えなければなりません。

我々に与えられた弱さは、神様が働く神様の働き場所です。我々の弱さをとおして神様は働きます。だから、皆様にお勧めします。自分の弱さを認め、堂々と立ち向かってください。そして、神様の助けを祈り求めましょう。自分の弱さを認める人は、自分以外の人々の弱さを認めることができます。弱い人々と神様は共におられることを確信するようになります。そして、我々は弱い人々と連帯し、共に生きる道を模索しなければなりません。

強さ、多数(メジャー)だけに焦点を当て、強い人、メジャーな人だけのために存在する社会は健康な社会とは決して言えません。無視されやすい弱さ、少数(マイノリティー)の価値にあえて目を向け、関心を向け、共に生きていける社会体制を作っていくことはとても大切なことです。

弱さを問題扱いするのではなく、個人の個性として受け入れられる社会を作っていきましょう。我々が生きているこの社会が弱者を受け入れ、互いの違いを認め、許し合い、理解し合える社会を作っていくために、共に祈りましょう。

2018年9月26日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録